



## 医療における武士道精神

手稲区支部 白崎 修 一

2011年新春、私は久しぶりにゆったりとした自分の時間を確保することができ、これまで読むために蓄えていた本を一冊ずつ消化することを目標に時間を費やしていました。他愛のない本が多かった中、驚愕の出会いを感じたのが内田樹著の日本辺境論（新潮新書）でした。

この本は内田氏の言葉を借りると「卑弥呼の時代から現代まで、仏教からマンガまでを「辺境」というただ一つのスキームで論じたいへん大雑把な本」で、「「辺境性」という補助線を引くことで日本文化の特殊性を際立たせる」ことが目的なので、読み物としては流れるが如く内田氏の持論を語りかけてくるので面白いのですが、ここで私のオピニオンとしてのお話に直接は関係ありません。しかし、この本に出てくる「武士道」についてのクダリに甚だ共感を覚えたので、ご紹介したいと思います。

武士道においては新渡戸稲造の「武士道」という名著があります。それによると、武士の倫理は「卑劣な行為を忌む義」、「敢為堅忍としての勇」、「惻隱の情たる仁」、「礼儀作法」、「信実としての誠」、「名誉」、「忠義」、「克己」などのもろもろの徳から成っているそうです。一つ一つを簡単に解説していきましょう。

義は、儒教の主要な思想であり、五常（仁・義・礼・智・信）のひとつです。正しい行いを守ることであり、人間の欲望を追求する「利」と対立するもの、要するに、人間の行動・志操に関する概念で悪を羞むる心のことを指します。

そして、勇。勇氣は義しき（ただしき）ことを為すことにつながります。論語にある「義を見てせざるは勇なきなり」です。さらに仁、これは他人のことをいたましく思っ

てやがては人の最高の徳である仁に通じるとされています。惻隱の情は、かわいそうだと思う心、弱者や虐げられた者への思いやりです。義と合わせて「仁義」とも言われますね。「医は仁術」の仁です。

礼儀作法の真意は、相手を敬う気持ちを目に見える形で表現することであり、長い苦難に耐え、親切で人をむやみに羨まず、自慢せず、思い上がらない、自己自身の利益を求めず、容易に人に動かされず、およそ悪事というものをたくらまない、ということです。

「誠」とは、「言」と「成」という表意文字の組み合わせであり、言うことと心が一致して矛盾がないことを表しています。新渡戸は、「真実と誠実なくしては、礼儀は茶番であり芝居である」と説いています。

また、名誉は「人生の至高善として尊ばれた。富にあらず、知識にあらず、名誉こそ青年の追い求めし目標であった。多くの少年が父の家の敷居を超える時、世にいでて名を成すにあらざれば再びこれを跨がじと心に誓った。しかして多くの功名心ある母は、彼らの子が錦を着て故郷に還るにあらざれば、再びこれを見るに拒んだ。恥を免れもしくは名を得るためには、武士の少年はいかなる欠乏も辞せず、身体的もしくは精神的苦痛の最も厳酷なる試練にも堪えた。少年の時に得たる名誉は、齢と共に成長することを、彼らは知っていた」と書き記しています。これらのことを考えていくと、私たちの心の中に失われていた何かを感じませんか。

さらに、「忠義」です。西洋にも忠義の概念は存在していました。ただし、それは個人主義思想の下、個々の人間に権利が認められるからこそ、人が他人に対して負っている義務につい

ては大きく軽減されているというものです。武士道においては、個人は国を担う構成成分として、個人よりもまずは国が存在して、主君や国家に対し真心を尽くして仕えることなのです。医局内での研修医の立場はまさにこれではなかったでしょうか。

そして自己の欲望を抑える心、自制心を表す「克己」、新渡戸稲造の「武士道」の原文では Self Control です。これは、自分の感情を常に平常心であるようにコントロールすることで武士の品性を保つというもので、不平不満を言わない忍耐と不屈の精神を養いつつ、他者に不快な思いをさせないためにも武士は自分の苦しみや悲しみを外に表さない「礼」を重んじたと新渡戸は記しています。

滅私奉公的な気持ちで行ってきた医療の世界、医療者側、患者側双方において次第にこの心が崩れてきているのではないのでしょうか。

内田氏は同書の中で、「努力と報酬の間の相関を根拠にして行動すること、それ自体が武士道に反する。新渡戸稲造はそう考えていました。私はこのような発想そのものが日本文化のもっとも良質な原型であるという点において新渡戸に同意します。」と述べています。耳が痛い話です。

武士道は学問ではありません。武士道を成文化した文書は存在しません。新渡戸が留学していたベルギーにおいて、日本では学校で宗教教育を行っていないと言ったところ、それを聞い

た学者が驚嘆して、「宗教なしでどうやって道徳教育を授けているのか」と言ったことをきっかけに、日本人の倫理を英語で英語圏の人々に説明するために「武士道」を書いたとされています。

私は武士道に接したことはこれまで一度もありません。内田氏の本を読み、新渡戸稲造の「武士道」に触れたことで、武士道に感化されたわけでもありません。でも、現代社会に失われている何かを感じました。

われわれは、日本人として生を受け、日本人として暮らしていく中で知らず知らずのうちに武士道の心を体得していたのではないのでしょうか。それが何か見えないもの、もしかしたら戦後日本が模倣しようと、模倣すべきと努力していたアメリカ的な契約社会の形態によって、少しずつ薄められていったのかもしれませんが。

そしてそれは、医療崩壊と世間ではいわれているけれども医療自体は決して崩壊していないにもかかわらず、医療者と患者における関係を大きく崩れていく見えない力になっている、そんな気持ちにさせられてしまったのです。

武士道の元になっている儒教の考えや武士道そのものが良いものかどうか、それについて深く学んでいるわけではないので私自身、曖昧な部分が沢山ありますが、少なくともちょっとぐらいは見直す意味があるのではないかと感じた次第です。

(札幌秀友会病院)